

Amy Tan

THE HUNDRED SECRET SENSES

Translated by Mizuho Ozawa

Kadokawa Shoten

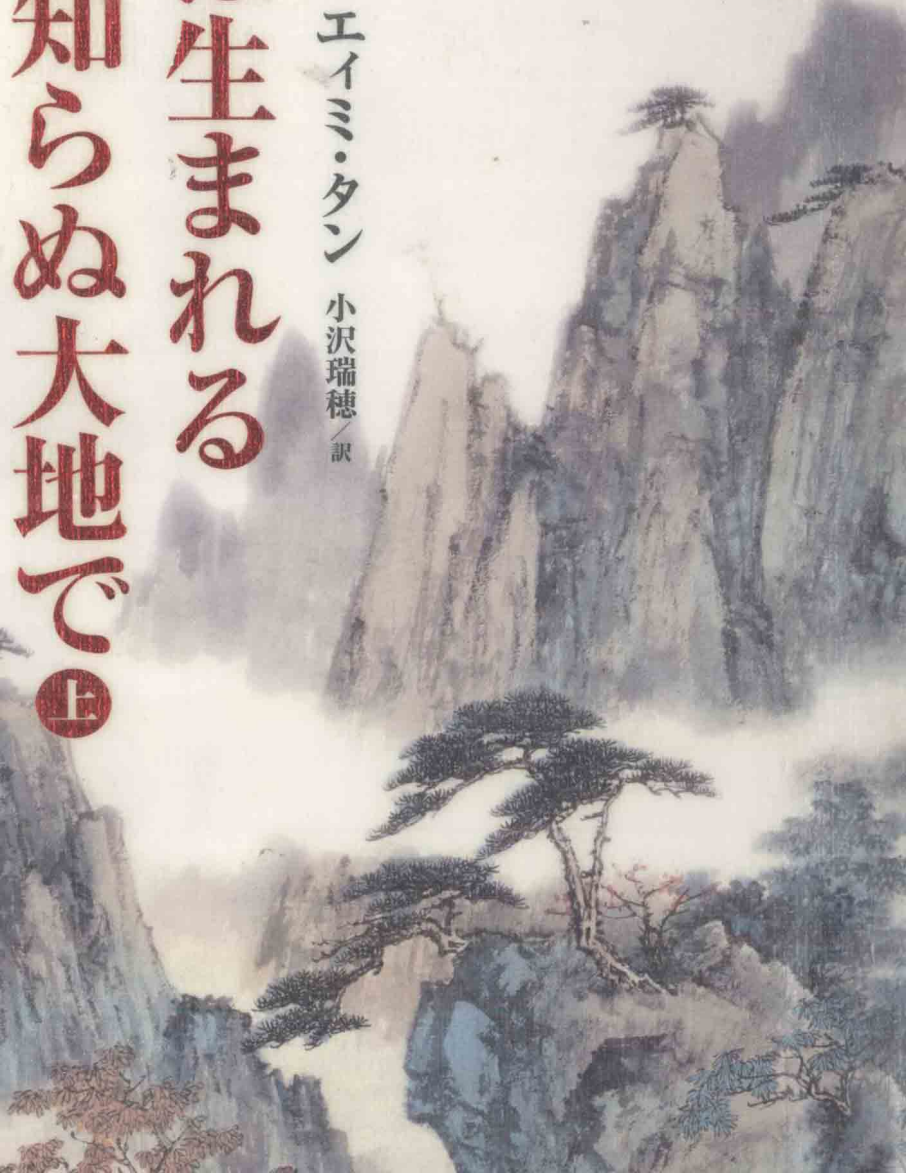
エイミ・タン

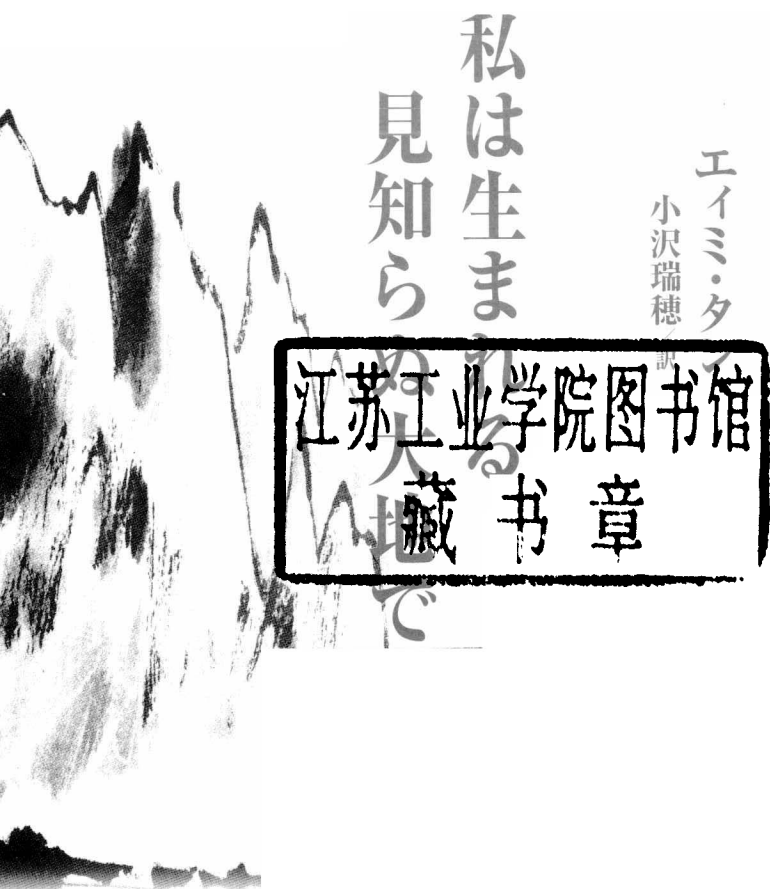
小沢瑞穂／訳

私は生まれる

見知らぬ大地で

上





Amy Tan

THE HUNDRED SECRET SENSES

Translated by Mizuho Ozawa

Kadokawa Shoten

エイミ・タン (Amy Tan)

1952 年、カリフォルニア州オークランド生まれ。

フリーランスのライターをするかたわら書いた処女作『ジョイ・ラック・クラブ』が大ベストセラーに。「米文学界のシンデレラ」といわれる。

他に『キッチン・ゴッズ・ワイフ』がある。本書は第三作。

弁護士の夫と共にサンフランシスコ在住。

小沢瑞穂 (おざわ みずほ)

東京都出身。立教大学英米文学科卒。翻訳家。

主な訳書に『ジョイ・ラック・クラブ』『キッチン・ゴッズ・ワイフ』『ミュータント・メッセージ』(以上角川書店)『グラス・ダンサー』(めるくまーる)『判決前夜』(新潮文庫)。

私は生まれる 見知らぬ大地で 上巻

エイミ・タン

小沢瑞穂／訳



1997年4月25日 初版発行

発行者／角川歴彦

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102 振替 00130-9-195208

TEL 営業03-3238-8521 編集03-3238-8555

印刷所／暁印刷株式会社

製本所／株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©・Printed in Japan

ISBN4-04-791259-X C0397

私は生まれる 見知らぬ大地で 上巻

THE HUNDRED SECRET SENSES

by

Amy Tan

Copyright © 1995 by Amy Tan

Japanese translation rights arranged with

Amy Tan c/o Sandra Dijkstra Literary Agency

through The English Agency (Japan) Ltd.

Translated by Mizuho Ozawa

published in Japan

by

Kadokawa Shoten Publishing Co., Ltd.

眞実のために

謝 辞

この小説を書くにあたり、ここにあげる多くの方々の思いやりと助言、会話と支えを頼りにさせていただいた。ババルー、ロナルド・バス、リンデンとローガン・ペリー夫妻、ドクター・トーマス・ブレイディ、シェリー・バーン、ジョーン・チェン、メアリー・クレミー、ドクター・アサ・デマッテオ、ブランドラ・ダイクストラ夫妻、テリー・ドクシー、ティナ・エン、ドクター・ジョセフ・エシュリック、オードリー・フアーバー、ロバート・フーソラップ、ローラ・ゲインズ、アナとゴードン・ゲッティ、モリー・ジャイルズ、エイミー・ヘンベル、アンナ・ジャードイン、ビクター・リー・ケンフィールド、ドクター・エリック・キム、ガス・リー、コーラ・ミヤオ、スザンヌ・パーリー、ベイ・サー・バオ村の人々、ロビンとアニー・レンウィック夫妻、グレゴリーアッロー・ライリー、ロック・ボトム・リメイндаーズの方々、フェイスとカークパトリック・セール夫妻、オーヴィル・シエル、グレッツチェン・シールズ、シエルバーン・ハウス図書館スタッフ、ケリー・サイモン、ドクター・マイケル・ストロング、デイジー・タン、ジョン・タン、ドクター・ステイヴン・ヴァンダーヴォート、リーチュン・ワン、ウェイン・ワン、ユー・ハン・ワン、ラッセル・ウォン、ヤドーの人々、そして犬のゾー。

彼らに心から感謝するが、この小説の真実のために彼らがそれと知らず適切なやり方で貢献してくれたことについて彼らにはなんら責任はない。

私は生まれる 見知らぬ大地で 上巻 目次

第一部

一章 陰の目をもつ少女

11

二章 人をとる漁師

41

三章 犬と羽毛のボア

57

四章 幽霊商人の家

73

五章 洗濯日

87

第二部

六章 蛭

113

七章 秘められた感覚

127

八章 幽霊をつかまえる人

145

九章 クワンの五十歳の誕生日

165

第三部

十章 クワンのキッチン

187

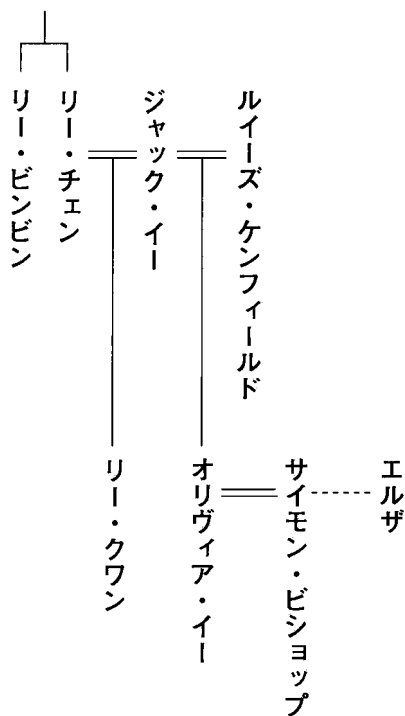
十一章 名前を変える

199

十二章 アヒルの卵を食べるとき

219

〈主な登場人物〉



◆前世◆

ヌヌムー……客家族の片目の少女、前世のクワン
 バナー・ネリー……アメリカ人、ヌヌムーの友人
 ツェン……片耳の行商人
 ケープ……アメリカ人将校、バナーの恋人
 イーパン・ジョンソン……アメリカ人と中国人のハーフ、ケープ將軍の通訳
 ラオル……バナーの世話をする老人

第一部

一章 陰の目をもつ少女

姉のクワンは自分が陰の目をもっていると信じている。姉には、死んで陰の世界に住んでいる人々や、サンフランシスコのバルボア・ストリートの姉のキッチンを訪ねては霧を残していく幽霊たちが見えるのだ。

「リビア」姉は私に言う。「昨日だれを見たかあててごらん」あてるまでもなく姉が死んだ人のことを言っているとわかる。

じつを言えばクワンと私は半分しか血がつかっていないが、それは口外しないことになっている。姉が私たち家族から半分しか愛される資格がないかのような、姉にたいする侮辱になるから。でも血縁関係をはっきりさせておくと、ふたりの父親が同じということだ。彼女は中国で生まれた。私と兄弟のケヴィンとトミーは、父のジャック・イーがアメリカに移住して母のルイズ・ケンフィールドと結婚したあとサンフランシスコで生まれた。

母は自分のことを「アメリカン・ミックス・グリルみたいなのよ、白っぽくて脂っこいフライ

料理ね」と言う。アイダホ州モスコで生まれた母は、バトン・トワラーのチャンピオンになり、ジミー・デュランテの横顔そっくりの変形のじゃが芋を育ててカントリー・フェアで賞をとったこともある。母は大人になったら別人のように——「大地」でオランを演じたルイーザ・ライナーみたいなほっそりして気高くてエキゾチックな女に——なるのを夢みていたと話してくれた。そうなる代わりにサンフランシスコに引越してケリー・ガール（訳注 派 遺社員）のひとりになったとき、母は次善の策に出た。私の父と結婚したのだ。アングロサクソン以外の人種と結婚したことでリベラルになれたと母は思っている。「ジャックと出会ったころは人種がちがう男女の結婚は法律で禁止されていたのよ。私たちは愛情のために法律を犯したの」母はいまでもみんなにそう話す。その法律がカリフォルニアには適用されなかったことはおくびにも出さない。

母もふくめて私たちのだれもクワンの存在すら知らなかった。父が死んだとき私はまだ四つにもなっていないで死ぬ直前まで母はクワンの存在すら知らなかった。父が死んだとき私はまだ四つにもなっていないかった。でも父と一緒にいたときはおぼえている。カーブしたブランコをすべって父の腕に飛び込んだこと。父が投げ込んだ銅貨をさがしてプールにもぐったこと。そして病院で会った最後の日に父が話してくれたこと。それは長いこと私に恐怖を与えつづけた。

五つのケヴィンもそこにいた。トミーはまだ赤ん坊だったので母の従姉妹のベティ・デュブリーと待合室にいた。母と一緒にアイダホから引越してきた彼女のことはベティおばさんと呼んでいた。私はべたべたするビニールの椅子すに坐り、父が昼食のトレイから渡してくれたイチゴ味のジェローのキューブを食べていた。父はベッドで上体をおこし、ぜいぜい息をしていた。母は泣いたか

と思うと朗らかにふるまった。私はなにが起きているのか考えようとした。つぎにおぼえているのは、父がなにごとかさやくと母がからだを寄せて聞き取ろうとしたこと。母の口がどんどん大きく開かれていった。つぎに母は、恐怖にかられたようにきつと私のほうを振り向いた。私もぞっとした。どうして父はわかったんだらう？　ダディは私が亀を水洗トイレに流したのをどうやって見つけたの？　今朝、スローポークとファストポークと名づけた私の亀を流したことを？　私は甲羅の下がどうなっているのか見たかった、そして亀の首をもいじまったのだ。

「あなたの娘？」母の声がした。「連れもどす？」私を檻おりに入れろと母に命じたものと思った。ソファを噛みちぎったうちの犬のバトンズが父に檻に閉じ込められたように。そのあとで大混乱になったのをおぼえている。私の手からすべってがちゃんと床に落ちたジェローのボウル。写真を見つめている母。その写真をつかんで笑っているケヴィン。そして私が見たその小さい白黒写真には、髪の毛がまばらにはえたやせっぽちの赤ん坊が写っていた。母が叫ぶのが聞こえた。「オリヴィア、口答えは許さないわ、ここから出ていきなさい」私は泣いていた。「いい子にするから」

そのすぐあとで母が告げた。「ダディは私たちをおいて行ってしまったわ」そして母は、ダディのもうひとりの娘を中国から呼びよせて一緒に暮らすと告げた。私を檻に入れるとは言わなかったが、私はなにもかもつながっているような気がしてまだ泣いていた——渦巻きながら流れていった頭のない亀、父が私たちを見捨てていったこと、もうひとりの女の子がまもなく私の代わりに家に戻ってくることに。会ってもいないのにクワンのがもう怖かった。

十歳になったとき、父は腎臓が悪くて亡くなったと聞かされた。普通の人は腎臓が二つしかない

のに父には生まれつき四つあったと母は言った。そのどれもが機能しなかった。ベティおばさんはどうしてそうなったかについて自説をとなえた。彼女は『ウィークリー・ワールド・ニュース』で仕入れたにせよ、いつも自説をもっていた。父はシャム双生児として生まれるはずだった、と彼女は言った。でも子宮にいたとき体力が強かった父が弱いほうの兄弟を取り込み、余分な腎臓を受けついだというのだ。「たぶん彼には心臓も胃も二つあったんじゃないかしらね」ベティおばさんがそのシナリオをでっちあげたのは『ライフ』誌にロシアのシャム双生児の記事がのったころだった。腰でつながったターシャとサーシャは、奇形児として生まれつくにはあまりに美しい姉妹だった。たしか六〇年代、私が細胞分裂について習っていたころだ。そのロシアのシャム双生児とクワンを交換できたらと願ったのをおぼえている。そうすれば血が半分つながった姉妹が二人——二人でひとり——でき、私たちが一緒に縄とびをするところを見たくて近所中の子供たちがみんな私と友達になりたがるだろうと思ったのだ。

ベティおばさんはクワンの誕生にまつわる話も聞かせてくれた。それは胸をうたれるどころか恥ずかしくなる話だった。戦争中、私の父は桂林キンリンの大学生だった。父はいつも夕食用に生きた蛙かえるを街はずれの市場にいたリーチェンという娘から買っていた。のちに父は彼女と結婚し、一九四四年に娘が生まれた。それが写真に写っているやせっぽちの赤ん坊、クワンだった。

ベティおばさんは両親の結婚についても自説をとなえた。「あんたのお父さんはハンサムだったのよ、中国人にしてはね。それに大学も出ていたし。私やあんたのお母さんと同じように英語が話せたわ。そんな彼がどうして田舎娘と結婚するの？ よんどころない事情があったからよ」そのこ